

山形短期大学民話研究センター資料叢書

田の中の田三郎

近きよ姫昔話

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

田の中の田三郎

近きよ姫昔話

編 武 田 正

近きよ姫昔話

田の中の田三郎

5	牛方と山姥		
7	お文殊さまと小僧 ――七枚のお札――		
9	二つ森		
10	二つ森のお稲荷さま		
12	狐の嫁入り		
14	狐のお産		
16	長い名		
19	くいごこむかし		
22	こぶとり		
24	舌切り雀		
25	瓜姫子とアマノジャク		
27	猿聲 食わず女房（田の中の田三郎）		
32	和尚と小僧		
34	南の山の馬鹿聲（五話）		
36	佐兵ばなし		
38	酒の籠抜け・嶋蔵と佐兵の謎とき・佐兵の 首をはさむ・彪の皮の屋根・魚屋が抜かつ だ話・旦那に行きたくない金・死んだ馬が 草食う・田植えの名人・エジコ作り・二十 才が出た・十一毛の猫		
55	九兵衛		

油取り

子育て幽霊

馬娘

かちかち山

鬼婆（弥彦山の鬼婆）

猿蟹合戦

笠地藏

団子どの

不動粥

山崎の棘抜きの家伝薬

五輪窪の送り狼

雷さま（福島）

お杉

一足片片

89 88 87 87 86 85 78 75 70 68 61 59 58 56

佐兵ばなしのことなど

— あとがきに代えて —

91

手まり唄

たんたんたきのし 四方れんげの花開き

むかえのやんまの雨ふり花は

宵につぼんで 夜中にひらく

朝の起き時

みな散れる のみこみとつて来い

（本書中に使用した「わらべ唄」は近きよ姫の唄ったものである）

かえるの葬式

びつきどの　びつきどの　いつ死んだ
ゆんべの寒霜^{かんそ}で　けさ死んだ

おばさま来たから　戸を開ける

がらどん　がらどん　がらどん

節をつけて、上の小石で下の小石を打ち
ながら何度も何度もかぞえる。いたずら小
僧にいじめられて死んだ蛙の茶毘^{だみ}、こうし
てにぎやかにかぞえて、砂山をほって見て
生きかえったかを見る、生きかえることも
ある。

生きかえったかえるは子どもたちも、よ
ろこんで草むらへ送りかえす。(近きよ)



近きよ 画

牛方と山姥

「さかな、さかな」

て、売って歩いて、そうすつど夕方になって、魚が売れなくなってしまつて、こんどはどこか宿探しに、農家の家でも泊つど思つて行つて、山の中ずうつと行つたとき、うしろの方から、

「魚売り、魚売り」

て呼ばらつじやど。

「魚食^かせねど、呑むぞ」

て追かけらつた。そうすつじど、一匹投げては逃げ、また追かけられつど逃げ、とうとう家見つけて、その家さ寄つたところが、隠つたところが、魚食せねど呑むぞというた鬼婆の家だけど。そして、ワラワラ屋根の上さ登つて、こういう火焚く上さあがつてしまつたど。そうすつど、昔、生魚でない塩魚ばりなもんだから、喉あ乾いて大きい釜さ湯沸して、お湯のんで、こんどは甘酒のんでだ。そし

てこんどは蔑^{よし}抜いて、その鍋さ、ずうつと蔑立てて、ツツウ、ツツウと吸ったつて。甘酒のんだど。そしたら（鬼は）眠^ねぶかけて眠っただもんだから、鬼が、甘酒なくなつて釜がピリピリピリピリというもんだから、

「なんだ、こりや。キリキリ虫あさやずる。キリキリ虫あさやずる」

なて、釜の焼けつくのも知らねで、眠てしまった。そして目覚めた時は、ピリピリ・ピリピリとなくなつていた。

「この畜生、ほに、おらほの火虫の畜生は、みなまぐらいあがつた」
なて、こんどは、

「こんじえ、分んね。眠るはあ。今晚は温^{あた}かいから、木の唐戸さ入つて眠んべはあ」

て、木の唐戸さ入つたんだど。

そうすつど、魚売りが降りてきて、大きい釜さお湯沸かして、唐戸の上さあがつて、キリで穴開けたんだど。キリキリ・キリキリと。

「キリキリ虫あさやずる。キリキリ虫あさやずる」

なて眠^ねった。そして段々に穴、大きく開けて、そのうちに鬼は眠ぶってしまつた。

ガラガラお湯の煮えるまで煮たんだど。そしてこんどは、穴からどうどう・どうどうと落としてしまった。そうすつど、中で、熱い熱いと騒いだげんども、外から錠掛けつだから、でて来^こらんねくて、じだばだで中で死んだど。そして鬼退治したんだど。鬼婆^{おば}だつたど。どーびんと。

お文殊さまと小僧　― 七枚のお札 ―

小僧が本山さ登って行くとき、方丈さまから、

「途中で鬼などに会って、難儀があつたら、この札まくように……」
て、札あずけらつて行つた。

「砂山でろ」というと砂山でる。またそこのり越えて、こんど追^おかけられつど、大

川でろて投げつど大川でる、七枚だかお札もらつて、そうして、〃バラ藪でろ〃というどバラ藪でるし、〃火の山でろ〃といえは火事の山でたりして、とうとう本山まで登って行くどこだつけ…。

そして、途中でとんでもないひどいところに出会つた。人を焼いて脂とりの場所さ行つた。

「何だ」

というたら、人を串さ刺して、ジワジワ・ジワジワで焼いてよ、脂とりしてゐる。

そうすつどはあ、こんど小僧あ苦しくてよはあ、大声立てたところあ、そんでき自分が夢みて、夢だつたど。

二 つ 森

むかし、二つ森というのは、長者さまの粕の山だったど。それは船橋（高島町）の黒田番内という長者さまであつたそうだ。

その人が自分の土蔵ねさ眠ぶつてはあ、夢ものがたり…。

ネズミが騒いで土蔵の中の粕を食つて、サラサラ・サラサラと落ちんの、土蔵の金蔵かねぐらさ入つて眠つたもんだから、金の落ちる音に聞いたんだど。それほど金持な長者だったど。

そして文殊さまと智恵くらべしたど。

「ほんじゃ、文殊がなんぼ智恵あろうども、おれぐらい金あつか」
て。

「んじゃ、その番内になんぼ金あつか、文殊山の木さ、皆下げられつか」
そういう競争したど。ほんで、罰あたつて、貧乏になったんだど。

二つ森のお稲荷さま

二つ森に、お稲荷さまあつこで、そのぐるりに川あつて、雑魚釣りに亀岡の人が行つて、何だか、カクカク・カクカクと眠ぶたくなつて、川さ曲るんだど。不思議だな、今頃こがえして眠ぶかけ出るなんて…。

ちよつと見たれば、川の向いに狐、ちゃんとして、手まねぎするんだど。こう手まねぎするたんびに、カクカクと曲んのだど。

そうすつど、こつちでも、狐に負けねで、タッタッタッタと手まねぎすつど、狐あクラクラ・ジャポんと、川さ入つて逃げて行つてしまつたど。

人には敵かなわねごで。なんぼ狐だというたて、狐に化かさつていねぞというもんで、雑魚いっぱい釣つて行つたど。

またそんげなことすつど、狐ざあ返報がえしするもんだ。必ず返報がえしされんべさと、みんなにいわたど。

「は・つ・げ・な・畜・生・に、おれあ負けていらんね、おれあこの前、狐どこ川さ入つたん

だ。負けていらんね」

そして、こんどは久しく経ってから行った。そしたら、やっぱりその狐は出ないで、びつしり獲ったんだど。そんでそこは二つ森のぐるりは畠だから、そのこの作場道さあぐらかいて、でんとしたんだど。

「君はそがえして、日は暮れんぜはあ、そんげなことしたら、暗くなんべちやえはあ」

「やかましい、おれあ狐に化かにさつでいねぞ」

「なんだ、狐なて、君何語っていんなだごど」

「おれどこ化かすんべと思つたて、間違うぞ」

決して動かねずもよ。「歩べ、歩べ」なて言うたて、いっこうに動かねず。そして遂にこんど、そがなこと語つて暗くなつてくると思つて、ビリビリ追つ立てらつで、来んべと思つて、ここさ置いっだハケゴ見たらば、魚一匹もいなかった。狐みな盗らつたど。何言うたて狐にあ、返報かえしされるもんだ、ほれ見ろ。

狐の嫁入り

泉岡（高畠町）に棺屋がいてやった。

夕方、棺作りしつたとこさ、ダダーツと一匹の小さな狐が入って来た。そうすつど、棺拵こしらへっていた桶、バツとかぶせたんだど。そのうしろさ大きい犬が来たど。

「ああ、やつぱり、犬に追わっじやんだな」

その辺りはずうつと萱野であつたそうだ。二つ森から泉岡さ出る道はなあ、そして久しくいたげんども、暗くなつて、犬もいなくなつたし、それから棺屋は、「そげな小つちやこい身体なりして、一人ばり騒さわんから、そういうもんなんだから、氣を付けろよ、今度犬なんか追わんねように、行けよ」

と放してやった。

ところが、それから何年ぐらい経つたんだか、しばらく経つてから、侍のような姿して、二人が棺屋に訪ねて来たつて……。そして、

「この前に、二つ森のお姫さまが助けていただいた。こんどはいよいよ高玉（白

鷹町）のお稲荷さまにお嫁入りだ、呼び申して来いといわつて来たんだ」

て、お使いが来たど。そしてその棺屋が、

「そがなことあるもんだべか」

て思ったげんど、馬鹿にさつだと思つたげんど行つたど。

「ここで、目隠^{おぼ}して、背負^{おぼ}つておくやい」

ていわつて、背負^{おぼ}つた。そして降ろさつたところが、すばらしい立派な御殿の座敷さ降ろさつた。

そして、そのムカサリもちやんと整つて、今度いよいよ御馳走が出て、ムカサリが行つたんだど。それが大名行列と同じだつたど。鉄箱から何から、簞さのつてなつし……。そしてこんどは、お膳さ出たものは、お分けにして包んで、そして持たせらつて、また背負^{おぼ}つて、目隠^{おぼ}しさつて、道まで送らつて来た。そして家に帰つて来て、お分けを見たところが、お分けが大抵魚だら一匹まんま、鯉だら一匹まんま、塩引きだら一匹まんま。そんでも庖丁のかかったのは一人前だけあつたど。それがそこ通つて行つた祝儀帰りの人のお分けだつたけど。（むかしのお分

けは「苞^{つと}こ」だった）そのものだけが庖丁掛かっていたけど。そして使わっじやもので食んねものは、蛙^{びつき}の乾物だけだっけど。

「やっぱり狐だなあ」

て、その人は、

「一生、いまいっぺん、あのような御祝儀、狐の御祝儀見たいもんだ」

て、繰返し語っていったけど。それで、高畠の魚屋は魚は盗まれる、鯉屋は鯉上げられる、ぐるりはすばらしく被害あった。むかしは狐の嫁入りに人を嵌^はめるのが本祝儀だった。

狐のお産

御所山のある部落で、そこのお医者さまがな、夜、立派なお侍の姿して来た者に、お医者さま頼みに来らった。

「その家の奥方が、今、お産で難産だから、どうぞ早くお産させてもらいたい」
て来らったのだ。そして医者さまは冬だったから、ソリさのせてもらって
行ったところが、やっぱり狐だったから、立派な家さ案内された。そして寄つて
みて脈をとったらば、人でない。狐だ。んだげんども、その医者さま黙って見
て、お産させて来たんだ。そして次の日ソリ引かせてやった自分の家の若いも
のに、

「決して言うなよ、ソリの後尋ねて行つて見てけろ」

て行つてみたところあ、その原の真中さ一枚蓆敷かつてだ。そこでビールと
罐詰と何とか御馳走したものだ。それがころんと、ビール瓶が転がって、罐詰
が開かつていてだ。

「決して医者が夜中に狐をお産させたんだ。医者呼ばらっじやんだどなて、世
間から言わっじや人目悪^{わる}れから、決して話し^{のし}んなよ」

て、口止めたんだ。そして札に、そんな時熨斗紙さ立派に包んで出したげ
んども、開けてみたらば五円札だった。むかしは五円といえは大きい金よ、そ

の五円どこから求めたかといえ、百姓屋の丸蓑たがを持つて、熊の皮だつて売つたんだつて。

長い名

むかし、番頭・手代・五十何人とか七十何人とかの大した大尽だもな。大金持の長者さまだもな。

そこさ、久しぶりで男孫ができたわけだ。そうすつど、その旦那が丈夫で長生きして、えらい孫になるように、こんどは法院さまさ名前つけてもらいに行つたど。その名前つけてもらつたら、とにかく憶えたてなんねような名前だもんだものな。

「エツケモツケ、ケモケ、キンチャクチャクノチャクモツケ、イツツニカンチヨコライ、トリニモトツタカタケバヤシ、マエノマエノマエバヤシ、テキスイテキ

スイ、リンボウシャ、オンボウシャシャタカニユードウ、ハリマノベツトウ、チャ
ワン、チャビシヤク、ハリマノヒコネノヒコスケ」

（または「イチギツチョ、ニギツチョ、サンゴノベツトウ、スツトツトウ、チョ
ウヤニカイボ、タナツリ、ズブクグリマタジロウ」ともいう）

という名前だもの、そういう長い名前つけてもらって、旦那が憶えるばり容易
でなく、やつと憶えたわけだ。やつと憶えて、こんどそれから番頭から手代から
皆呼ばって、自分が高い座敷にいて、あとずっと低いところに皆集めらつて、

「エツケモツケ…」

「エツケモツケ…」

学校生徒、イロハ習うように、一晩げ教えらつだど。一晩げでは憶えらんねご
で。そしてこんど番頭が憶えたごで。その番頭が、

「決して片名^{かたな}呼びなどしたりしてなんねえから、上から下まで、すっかり呼ばん
なねから…」

そういう風に教えらつじやもんだから、皆、紙端さ書いて、それから女中など

困って、字など番頭や手代など知っていんべげんど、知らね人は大困りして、

「そげなこと、いっそ、呼ばねほうええ・ええはあ」

なていうわけだ。面倒くさくて……。そのうちに、五つばりなつた時に、井戸さ入ったど。んだからこんどは、梯子探^たねに、三間梯子の長いの探^たねに、呼び流しさんねから、上から下まで数える。そいつ、じだんだふんで、おかしくておかしくて、「エツケ・モツケ……」て半分まで行つて間違つて、「エツケ・モツケ……」と何べんも何べんも言うて、

「今、井戸さ入つて死ぬから、早く貸してくれ」

「はあ？」

なていうてるうちに、とうとう死んでしまった。

んだから、そがえな馬鹿な長い名前つけるもんでない。どーびんど。

くいごこむかし

じさまとばさま、くいごこ、めぐて飼っていたとき、

「ごこ掘れ、キャエン・キャエン・キャエン・キャエン」

と鳴くので、ごこ、こう掘ってみつど、ごちちからザク、あっちからザク、ザックザック・ザックと大判小判が出たのよ。そいつこんどじつちやとばちや庭さ寄せて、そして台所さ蓆ひろげて敷いて、並べてにこにて見つだど。

そこさ隣の家のいじわるばっちゃ、

「こんにちわ、火呉くつじえおくらえせ」

て、戸開けて来て、

「あらららら、ごちちの家では、金持ちだごど、そがな錢、どこから集めて来たのや、どつからもらったのや、あららら、えええごんだごど、こがえ金持ちで……」

「こいつは、おら家のくいごこあ、裏の畑さ行つて、ごちち掘れキャエン・キャエン、あつち掘れキャエン・キャエンというて掘つたら、こういう風かねに金出たなよ」

て、正直なばあさんといじわるなばあさん。

「ほんじゃらば、その犬借りで行かんね。くいごこ貸してもらわんなね」

「貸さんね、貸さんね」

ていうの、びりびり引っぱって行つた。そして掘つたところあ、

「こつちの方さ、ビダ。あっちの方さ、ビダ」

ていうの何だというたれば、牛の糞、こつちの方さ馬の糞、糞ばり出た。

「か・っ・げ・な畜生、おらだ家さばり、そだな糞あずけて、めぐないからはあゝ」
て、叩いて殺してしまつた。そうしてはあ、犬連て来ねもんだから、催促に行つたら、

「そつけなもの殺してしまつた」

そして、そこさ松の木植えたど。松の木植えたの、その木、ぐんぐんおが・つ・た・ど。そして松の木で、そいつ片見だからて、白彫つたど。白で米搗けば、こつちやザク、あつちやザク、と、また金がでた。そうすつどまた、隣のばさま、

「火呉・つ・じ・え、お・く・ら・え・せ」

て、火もらいに來た。そして無理矢理に臼をもらつて行つた。その臼借かつでいて、またこつちやビダ、あつちやビダ、てビダ糞くそばり出たので、ぶつ裂いて焼いでしまった。そしてこんど、焼いたの、

「灰はいばりももらつて行く」

て持たつて來て、風あ吹いて、枯木さ花咲いたど。そして殿さまから褒めらつじやど。

そしてまた、隣のじさま真似したもんだから、殿さまに引っぱつて行かつではあ、牢屋の中さ縛らつじやんだ。そして花咲じじいは正直だから殿さまから御褒美いだいて、一生安泰に暮したど。

こぶとり

正直なじさまとばさまと、いじわるなじじとばいたど。

正直なじさまが、鬼でてきたもんだから、青鬼だの赤鬼だから、じさまは人だから、鬼の踊りさはま[・]つて、その踊り踊つどき、数え方したど。

一^{いち}ビキ、二^にビキ、三ビキ、四^しビキ

おれも出て、五^ごビキだい

ドンドコドンのソレワイサ

と、じさまも混^{まじ}つて踊つたのだつたど。あんまりそのじさま踊り上手で、お[・]も[・]し[・]や[・]いもんだから、

「いまと（もつと）、踊れ」

「行くはあ」

ていうもんだから、

「明日^{あした}来いよ、明日の晩げ来いよ、是非とも来いよ」

「来るから、来るから」

ていうたげんども、

「来らんねど困つから、こぶ取つてやらんなね」

て、取つかえさつだど。そしてこぶあなくなつた。

そして次の日、意地のわるいばが、日暮つで行つて、こぶのないと見て、

「おれ、じさまもやんなね」

て、その山さ行つて、鬼あ出てきたとき、踊り踊んのさ混まじつたげんど、踊り

も唄も下手だべ、

「ゆんべあずかつたこぶも、やつからはあ」

て、こつちさ、くつつけらつで、泣き泣き行つたど。

んだから、決して人真似なのさんねど。

舌切り雀

(前半欠)

そのじさまが欲ふかいもんだから、重いつづらをもらつて来た。そして途中で開けてみたところあ、何かえ出てきて、みな体中、かつつあばがつで（引っかれて）、血だら真赤になつたど。そして、何も持つてくるものなくて、そして泣き泣き来たんだど。アーン・アンて…。

そうすつど、そのばさまが、

「ええ衣裳もらつて来んだから、こだなボロ衣裳着てらんねはあ」

て、丸裸になつて、そうしてヘラで尻叩いっただど。そして段々来たところあ、じさまは赤い衣裳でなくて、泣き泣き来たんだど。その泣き音を唄だと思つて、じさま大喜びで赤い衣裳着て来たと思つたんだど。

んだから、意地のわるいことしたりなんか、さんねど。

瓜姫子とアマノジャク

お盆のとき上げつたな、あまり大きい瓜割つたれば、おぼこ出たんだど。そして大事におがして機織りさせれば機織り、着物拵えさせれば着物拵つて、まず何さんねなてない、綺麗な瓜のような姫で瓜姫子と名付けたんだど。

じさまとばさま、稼ぎに行くときには、びだんと錠掛けて行くのだったど。

「なんぼ、じじちゃ・ばばちやの真似して来たたて、誰来たて、戸を開けんなよ」
て教えて行くなだけど。

瓜姫子が機織りしていつど、アマノジャクが来たど。そして、

「ここ、戸開けて呉^けろ」

て、ばつちやの声の真似して来て、片一方は、んだかと思つて、開けて呉^けつかと思つたげんども、

「こここの戸開けつど、ごしやがれつから、開けらんね」
て言うど、

「んじゃ、ちいとええごで、ちいとええごで」

て。

「一分だてええごで、二分だてええごで、こればり開けだて、ごしやがんねごで」
て、段々に開けて、手入るまでに開けたどこあ、こんどはビリビリ機場から瓜
姫子を引ずり出してはあ、殺してしまったんだど。

じっちゃとばっちゃ帰って来たときには、アマノジャクが瓜姫子を食って、瓜
姫子に化けつだど。

「ウリヒメゴ！」て来たところが、

「じっちゃとばっちゃ、今来たところだ」

瓜姫子の機に

アマノジャクあぶちのつて

キーコ パテン

キーコ パテン

ていうもんだから、

「さては、これは、ほだかな」

て思つて行つてみたら、機さ血あついているんだし、アマノジャクを引つかまえて、この畜生というもんで、殺したけど。

×

×

アマノジャクは当りまえに数を数えたりしないで、逆に数えたりするし、つむじ曲りだったど。また時刻の数え方も十千十二支ときを使つてむずかしくしたのは、アマノジャクに真似さんねように、あんな風にしたんだど。

猿

聾

娘が三人だった家で、その家では、うしろ千刈り、前千刈りの千刈田作つてで、うんと早魑で困り果てて、親父さまがそこさ行つて、

「この田さ水掛けてくれる聾もらつたらええがんべなあ」

て。

「こいつさ水など掛けて呉つこんだら、おれあ、三人娘いだじだ、どれでもええあな呉れっけんどもなあ」

て言うたば、

「ああ、ほんじゃ、おれ掛けて呉れる。おれあ掛けて呉れっから、おれに呉る」
て来たから、誰だと思つたれば、猿コだつたずも。

「掛けて呉れっから、本当に娘呉れっか」

て言う。困つたこと約束したはあ、なんぼ約束したつて、あんげな猿あ、前千刈・後千刈の水など掛けられつことない。大丈夫だと思つていたところあ、次の日、満々と水掛けらつてだ。そうすつどはあ、困り果てて、頭痛みして…。

「何、そがえに、どっちゃ（父）、何ほがえに頭痛みしてんなや」

「こういうわけで、前千刈・後千刈さ水、ダブダブと掛けて呉る聳さだら、おれ娘、三人もいる、どれでも呉れると言うたらば、猿だっただけ。そんではあ、こんど何でもかんでも呉る呉ろといわつて困り果てて、頭痛みしたんだ。それで、

お前だ、誰か行つて呉れっか」

そしたら、一等大きい娘、

「おれあ、そつけな、なんぼ馬鹿だて、猿のオカタになんねから…」

二番目も、

「猿さなど嫁かね」

「ほんじゃ、おれあ殺されっこではあ、猿に八つ裂きにされっこではあ…」

て、親父が泣いていんなだど。三番目の娘が、

「ほんじゃ、おれあ行くから」

て、三番目の娘が行くことにしたんだど。

そうすつど、喜んではあ、猿が三番目の娘もらつて行くことに決めたごではあ。

「ほんでは、おれ、三番目の娘もらつて行くはあ」

喜んではあ、もらつて行つたど。そして山奥さ連て行かれんのよ。

そしてこんど、春の花の咲く三月頃、家さお節句に来ることになった。そして

二人で来ることになった。そして二人で来たわけだ。喜んで…。こんど猿あ、

「何持つて行ったらええがんべ」

「おら家の親父は餅好きだ」

「ほんじゃ、餅搗いてが…」

猿あ餅搗いて餅持つて来る氣だ。

「そだな、何かさ入ったの嫌いだという」

「ほんじゃ、なじよすつどええごど？」

「搗き入れの餅好きだし、臼がらみでも背負つて行ったら喜ぶべげんども…」

「ほんじゃ、臼背負つて行んこで」

て、こんどは猿は臼背負つて来たんだど。そして途中さ来たたら、すばらしい大木さ、桜の花咲いっただど。谷川さそつてだど。

「きれいな桜だな、こいつ持つて行ったら、お土産になんば喜ぶんだか」

「ほんじゃ、おれあ取つてくれっこで」

臼降ろそうとすつど、

「臼を降ろすと、土くさいて分んねなあ、降さんねなあ」

「ほんじゃ、その臼背負って登って取っこで」

て、臼背負って登ったんだど。桜の木さ臼背負って登って行ったもんだから、谷川さ落^おつでしまったんだど。

そんな時、泣きたくもないな涙こぼして、

「ああ、流って行く、流って行くはあ」

て、泣いっただんだど。そしたら、猿あ谷川流って、

さるさると流るる生命はおしくない

後にお姫は泣くばかり

て流って行っただど。

そして三番目の娘が、猿が谷川流って行って、死ぬのを見て、家さ帰って行って、そして親たちから喜こばって、親孝行したど。どーびんと。

食わず女房（田の中の田三郎）

田の中の一軒家に、若い者あ一人つこで稼いでいるとき、夕方、若い女が尋ねて来て、

「置いてもらいたい。置かんねなて言わねで、置いてもらいたい」

そうして、

「お飯食ねで稼ぐから、嫁にしてけろ」
ままか

という。お飯食ねで稼ぐええげんども、（夫が）いねうちにお飯、一生懸命で炊いで食う。

「今度、お飯食ねで稼ぐ嫁来たど」

て、隣の人がのぞき込んでみたど。そしたところあ、一生懸命ヤキメシ握って、髪ほどいて、そこからスポツと入ってやんのだど。んだから、あがえな。「お飯食ね」なて言うの、頭なの入ってやんな、あんげな化けものだ、あんげなごんでは、なんぼ食うか分かんねと、大騒ぎになった。

そしたところが、田の中の田ン三郎は、それでも信じねがったど。そんとき、晩方ごろ、田んぼのどこ来たとき、唄うたったな聞いたどこだど。

田の中の田ン三郎の御内儀は

お身のためにオバゴよ

オバ御に似合^みたら

ミヨウリ果報ござんべ

ネンネコ ヤイ

オンコロ ヤイ

て、子守っこしったど。そしたば、何しったと思つたら、狐コ背負^{おぶ}つてたんだど。そいつを田の中の田ン三郎に教えたわけだど。そうすつど、とんでもないオカタもらつたなて、喜んでゐるはあ、なじよなもんだか知つてたか、いつか稼ぎに行つたふりして、もどり返つて来てみろて教えらつじやど。お飯食ねで稼ぐなて、田ン三郎いねうちにこうして頭さ食うなだて、教えらつた。

そしてこんどは、そこ見つけらつじやもんだから、とうとう本性現して、田ン

三郎さ掛からっじゃわけだ。

そんとき、逃げて逃げて、田シ三郎が隠つたところは、菖蒲とヨモギの出つた草ぶくだったど。そこまで来たげんど、鬼はどうどう見つけらんねで行つてしまつたど。狐でなくて鬼だったんだど。

んだから、五月節句に菖蒲とヨモギ、さすんだど。

和尚と小僧

ある寺の小僧あ、和尚さまの代りに、法事に行つて、とにかく、一丁前のふりしたげんど、お経上げらんね。和尚さまの代理なてさんねげんども、気あきいた小僧っ子だったべ。

「行つて、終おやして来る」

て行つたど。んだげんど、お経さっぱり知しやねんだど。ちいとぱり知つてた

のも忘つで、前さ上^{あが}つたお膳見たど。そいつ、まずお経のふりして数えて来て、
終して来たど。

一に納豆 二に牛蒡

三ンがり大根 四ミ豆腐

五ろいし豆に 六じんだん

七に味噌 八ワラビ

九かんぴよう 十茄^{とお}子

十種類出さつだんだど。そいつ、ポック・ポック、ポック・ポックと数えたど。

「一に納豆、二に牛蒡、三ンがり大根、四ミ豆腐、五ろいし豆に、六じんだん、
カエーン。七に味…」

なて、終したごではあ。

南の山の馬鹿聲

(一)

馬鹿聲あ、いだった。

「嫁の口さばり食せだつてな、嫁ざあ居ねがらな、尻の口さも食せらんねがらな」

て、教えらつて、馬鹿聲は、

「ほら、食え。ほら食え」

て、嫁の寝っだうしろさ行つて、当てがっていたど。

馬鹿聲ざあ、そういうもんだ。

(二)

嫁もらってから、

「嫁の家さ行ったら、姑さま出て御座ったらば、皿だの、瀬戸ものなの出っから、

そんときは、南京皿か京皿か、唐^{から}からでも渡つて来たのだべかつて、立派なもの出されつから、そういう風に賞めんなねぞ」

て言わつて行つたど。八十才先になるような、婆^ばんちやが出てござつたど。そしたば、こんど、婆^ばんちや褒めたんだど。

「いやいや、南京ばあか、京ばあか、唐から渡つて来た、ばさまだべがつす」て、褒めたど。ばさま魂消たど。

(三)

寝相わるいもんだから、枕ば頭さ縛つて寝たんだど。寝たらば枕天井の方向いっだど。

馬鹿聲みたいにしていらんねんだからな。

(四)

馬鹿聲に頼んで用足しにやつたれば、「忘れんなよ」て言うてやつたれば、途中

の川で跳ねて、「ドッコイシヨ」て言うど、「ドッコイシヨ・ドッコイシヨ」と行つたつてな。

そして用足しでなくて、ドッコイシヨの用足しだったど。

(五)

尻さヤキメシ当てて、その嫁がおかしくて笑つて屁たつたれば、「熱くないから、さまसानったつてええ」

と、馬鹿聲が言うたど。

佐 兵 ば な し

(二) 酒の籠抜け

番所に、米沢から役人が来ているわけだ。そつから向うは御領、こっちは米沢

領。向うからは酒だの贅沢品がこっちさ流れる。そういうことはさせらんねごと
になっている。そうすつど、皆んなだええ酒欲しいもんだから、松川の頭かしらを来た
り、いろいろ関所破りみたいに来たもんだげんど、佐兵ばりは、小便の澄んだと
こ樽さ詰めて、そうすつど、

「なんだ佐兵、背中さ背負つてだもの、なんだ」

「こいつぁ、小便だ」

「何だ、小便、樽さ詰めて歩くものいたか」

「いや、小便だ」

「降ろしてみろ」

その侍が、ちよつとさぐつて（汲みとつて）飲んでみた。

「何よ、本当に小便だ」

「んだから、小便だて言うたどら…」

佐兵は有名なもんだから、戻したつても始まんね。

「馬鹿野郎にも、程がある」

なて、おん・つ・あ・つ・だ（怒られた）。

それからさあ、佐兵は、毎日毎日、樽で、今度は本当の酒運んだど。

（二） 嶋蔵と佐兵の謎とき

むかし、佐兵という、おどけたことばかり評釈きりで他人魂消らがしてばり話語る人だったど。そしてこの片目の嶋蔵さんという人は、これは学者だったど。そして、ここさ、通し佐兵があつちや廻りこつちや廻りして歩いたもんだからな、どこで飯食つて歩くなてないもんだから、そこさ泊ったど。

「ほんじゃ、今夜、佐兵まず、謎ときしんべ」
て言うたら、

「ほんじゃら、おれから謎とつか」

「え・え・から、ほんじゃらば、佐兵とかけて、何と解く」

て言うた。佐兵もなんぼ考えても考えらんねがったど。そうすつど、嶋蔵という人が、

「おれ解いでやる。佐兵とかけて、タムシと解く、その心は、ぐりぐり廻つてくる」

そうすつど、家内中が大笑いしたんだ。

「親方、ほんじゃ、こんどおれが謎かけんべ、嶋親方とかけて、何と解く」
その学者の親方もちよつと分んねがった。

「御祝儀の盃と解く」

皆んなだ、ちよつと分んねがった。御祝儀の盃なんて言わつでな。佐兵は、ま
ず返報がえしすんなだから、何て言うんだか、と親方も待っていた。

「その心は？」

て聞いた。

「その心は、一生のかため」

んだげんども、苦虫つぶしたような顔面したげんども、何とも仕方なくて、「今
夜ばりはあ、貴様に敗けた」て、カブト脱いだ。

(三) 佐兵の首をはさむ

また、佐兵は冬になつど、藁仕事して、やんやんと居つどこさ、ちえつと顔出すがつたど。そうすつど、

「佐兵来たらば、首はさんで呉れんべ」

て、みな、戸の陰さ隠つて…。

カラーツ、「何しつた。今日は何としつた、若衆」

て、首出した。そんで、首はさめて呉れんべどて、戸をぐいとすつど、戸は、
ぱつと一尺ぐらいで止まんのだど。

ばじだが

そいつは、ちゃんと、板っ端持つて来て、敷居さ置いて、上がっているから、
首はさまんねんだど。そして、「えへへえ」て笑つて行くのだど。そして、とうし
(ずつと) その藁仕事さ来て、いたずら語りして行くのだど。

(四) 彪の皮の屋根

そしてこんどは、

「おれ、とんでもない珍らしいもの見てきた」

佐兵のごんだから、また小馬鹿にしに來た、誰もあしよらうな（相手にするな）
と言ったげんども、

「とんな珍らしいもんだ、とつても見らんねもんだぜ」

「何だ」

「あの、彪の皮で屋根ふいっだどこ見て來たぜ」

「彪の皮なて、虎の皮だの彪の皮だつて、ほがえな、熊の皮も敷かんねに、彪の
皮屋根さ葺いたなんて、あんめえちやえ」

「どこだ」

「宮内!!」

また、佐兵は人馬鹿にしてはあ、小馬鹿にする、はつけなこと行つてらんね。
なんて藁仕事したんだつて。そのうちの若い者あ、まず、あしよらつて、

「ほんじゃ、そがな珍らしいものなら、おれあ行つてみんな、若し無いがったら、
佐兵、酒買うか」

「あまえ、ええ。」

「嘘だったら、酒十五杯、佐兵が嘘こいだら、十五杯、もしあったら、おらだは十五杯、ほんじゃ酒の賭しんべ」

そして、若衆は仕事やめて、宮内さ行つたんだど。一日がかり掛^かつこではあ。そして六角町あたりさ行つたらば、俵が一枚、屋根さ上がつていたど。そこ突^つん抜けて行つて、ずうつとあちこち皆見て、熊野さまあたりまで町中見たげんども、彪の皮など、さっぱりない。

「んだから、彪の皮なて、ありっこないのだず」

「佐兵なて、こういうことばり語^んのだから、馬鹿にさつで来^たんだから…。おらだ酒飲むばりだからええ」

なんて、若衆は笑い笑い来^たんだど。そしたら家さ来て、佐兵は待つてだ。

「なじよだった」

「なんだ佐兵、ほがえな彪の皮なて、あんめえちやえ、どこにもないけなあ」

「六角町にないけがあ？」

「六角町には米俵一枚上げっだどこあつけなあ」

「そいつよ」

「人馬鹿にした、この野郎、ほに…」

「ほんじゃて、お前だ、米なじよに勘定する」

「おれあ、米一俵・二俵って勘定する」

「米抜いってしまったもんだもの、俵（彪）の皮だべちや」

とうとう、文句言うたげんども、酒買わせらつて、飲まっだど。

（五）魚屋が抜かつた話

佐兵は、藁仕事で売つてるもんだからな。高畠とか泉岡にな。注文して毎年、カマス買うのだど。カマスは綴とじて十枚にして持つて行くのだど。そして持つて行つたところあ、魚屋では馬鹿にする気なもんだから、こうして裏表十枚のうちのを見たど。

「佐兵、佐兵、こいつはええなだげんども、中端なかはしあつて分んねなあ、こりや」

「なあに？」

「中端あつて、上あええげんども、中が不整いで分んねなあ、こんじゃ分んね」
て、返したど。そうすつじど、せつかく編んで来た、こいつで酒でも飲むべと思つて行つたの、飲みぼげだ。ほんでも、いっこうごしやがねで、

「ほだか、ほんじゃ今度あええの持つて来つから」
て行つてしまつたど。

そしてこんど、しばらくもよつてから、魚買いに来た。塩引をな。

「塩引頼まつじえ、一匹切つて二十人前切つておくやい、若衆に頼まつて来たんだから」

二十切つたど。一匹の魚切つたのだから、頭の方も尻尾の方もあるわけだ。

「なんだこりや、頭の方と尻尾の方と、中の方ど、中端あるな、こりや、こんじゃおれもいらね」

て帰つて来たど。魚屋、むかしの魚、そう切らつじやもんだから、とんな損したど。カマスどこでない、佐兵も行つてしまつたから、そいつあ売り呆けだど。

(六) 旦那に行きたくない金

むかし、鱒だの塩引の生鱒なの珍らしくて、買わんねから、魚屋いさばの前通つど、こうして見る人いっぱいいたんだど。佐兵も見つたのだど。そして佐兵は、こうして見て、あまり珍らしがつて見てるもんだから、その魚屋の旦那が、

「佐兵、佐兵、そがえに珍らしいか」

「珍らしい、珍らしいな」

「食つてみたかないか」

「食つてみたい」

「買わねが」

「高くて買わんねもの」

「佐兵だから、他の人よでないから、五文にまけんべ」

て言うたど。そうすつど、喜んで五文にまけんべと言うもんだから、まさか銭持っていたと思わねも、ボロ衣裳ばり着て歩っからなあ。ふところから出したど。

「はい、五文」

て。そうしたらば魚屋、いたましくなつて、

「ほんじゃ、佐兵、ちよつと待つてろ、まず」

そして、その魚さ行つて、

「鱒、鱒、まず、佐兵さ買わつで行んか、行かねか、行かね？行かね。…佐兵、悪いごんだげんど、こんどの切り魚、佐兵どこさ行かねて言うぜ、仕方ないから、今度の次まで待つてで呉ろはあ、こいつは分んねなあ、こりや」

「んだか」

て、佐兵は五文の銭持つてもどつたつて。

そしてこんど、すばらしい若衆の振舞いの注文受け取つて持つて行つた。そしてどつしり整そろわせで取りに行つた。そして、

「その銭、なんぼだ」

「なんぼ、なんぼだ」

その銭、ゾロツと出したど。そしてその旦那が銭とる氣になつたど。

「旦那、ちえつと銭に用ある。銭、銭、魚屋さ行んか、なじよだ。銭なじよだ、

行かね？錢が行かねて言うぜ、錢」

て、錢、がらつと持って来て、返報がえしさつだど。

まず、佐兵は狐みたいに返報がえしのしねえことざあないがったど。

(七) 死んだ馬が草食う

入生田から露藤・中島を通って米沢さ行く、むかしの江戸街道に五輪窪というところあるのよ。そこんどこ通って行ったらば、馬一匹死んでたつた。そうして、臭くて臭くて、寄つてづけなかつたど。夏で腐つて……。そいつ、佐兵あ見て来て、とんで跳ねて来たもんだから、若衆稼いだとこさ来て、

「あそこんどこに、死んだ馬、草食つてだけ」

「また佐兵あともんでもないことばり語んぜはあ、死んだ馬、草食つたりしないごで。」

みんな、あしよらわね（相手にならない）げんども、あしよらつた者もいだつたずも。

「ほんじゃ、嘘だか何だか行つて見て来い」

「ほだな、死んだ馬、草食ったりしてねごで」

「いや、行つて見てこい、行くじど分^わかつから」

「ほんじゃ、佐兵、どこにいたか歩^あでみろ」

暇な人だから、行くも。

「なじよだ」

「いや、臭くて臭くて、とっても寄つてつかんね、臭くて、臭くて」

「ほだべ、臭くて、臭くつたべ、草食つたべ」

いつでも、そういう風に、馬鹿にされんの承知だげんども、いつも引っかけんなだど。

(八) 田植えの名人

あるとき、遊んでばり歩くじだごでなあ、氣イ向き次第。田植えしつた時、みんな田植えしつたの見て、田の畔さ腰掛けで、涙こぼしつたて。

「なえだ、佐兵、泣いだりして」

「おれ、みんなの真似さんねもの」

「なにの真似さんねごんだ」

「みんな、あがえ上手に、曲げて、縄張つても曲げて田植えつどら。おれあ縄張んねつたつて曲がんねも」

「なんだ、この野郎、人馬鹿にしたことばり語つて、そがえ上手に植えられつこんだら、植えてみる」

「ほんじゃ、おれ、植えて見つか」

「植えてみる、まず」

みんなは縄張つて、うしろに下がつて行くげんども、佐兵は縄も張んねで、真直ぐに、チョポチョポと植えて行く。そして早いし、一つも曲んねがったど。田植えだらば、そがな上手な、なかつたど。

一日手使つて、お振舞いにあずかつて、そういう風な田植えの名人だつたつて。

何仕事でも名人だつたど。

(九) エジコ作り

エジコというものは、赤ン坊出つじど、エジコざあ、むかし作つたもんだべ。そのエジコざあ、一日に拵こしやえ上げなねのだど。ほだから、普通の人あ、朝暗いうちから藁ぶつて、そうして夜遅くまで作んなねがつた。

最初頼んだところあ、午ひるになつても遊んでいらつて、困つたど。

「佐兵、まず、なじよなもんだず。エジコ拵こしやつて呉るというけあ、拵つて呉んなか」

「拵う」

「今ごろから、拵こしやわれんなか」

「拵えしたらええがんべ」

「んだ、拵えさえしたらええんだ」

「んじや、拵えてやつから…」

「ほんとだべなあ、人馬鹿にしたこと、しんまいなあ（するまいね）、佐兵」

「心配すんな、まず」

そして作ったど。ちゃんと、夕飯食^かれる前に、終したど。
それなど、何綺麗だったか…。

(十) 二十才が出た

文殊山さ稼ぎに来てて、お月さまお出やったとき、
「ありや、東の山から二十才^{はたち}が出た。二十才あ出た」

むかしは暗くなるまで稼いだもんだからな。みんな魂消て、
「なにだごど、二十才あ出たざあ」

「見ろまず、あれあれ」

「なんだ、お月さまだどら…」

「んだて、おぼこだざあ、十三・七つて言うどら、十三さ七つ足したら、二十才だべちゃえ、めんどうくさいから、おらあ二十才て言うた」

て。こういうことばかり語って、人馬鹿にして歩いたって。

(十一) 十一毛の猫

「三毛猫あいるし、んだげんども、おれあ十一毛の猫見たことある」

「また、馬鹿なことばかり語っている。十一毛なていう猫あんめえちやえ」

「いた」

「なじよな猫だごど」

「佐兵は、そがな猫いたな見たことあつか」

「ある」

「なじよな猫だごど」

「毛は焼けた猫だも、焼^けばたしたもんだも、八毛で、三毛足^たしたら十一毛だべ
ちやあ」

そだなごどばり語ってたもんだど。

九 兵 衛

むかし、うんと博奕^{ばくち}打ち好きな男いて、毎晩げのように博奕打ちに行つて、親父に、なんぼおんつあつでもはあ、分んなくていたな、ある晩げ、負けてはあ、衣裳も何も剥ぎ取らつて、丸裸で来たんだど。来たげんども恥止^{しやうし}くて、街道歩かぬから、田ンぼ歩つて来たんだど。そしたら蛙^{びつき}は、

「ハダカダ、ハダカダ」

て鳴いたど。この畜生、人のとこ口あましあがつて、蛙^{びつき}の分際として、引つぱだきつけて呉れましようど、はたきつけたんだど。そしたら、

「キュウ、ベエー」

「この畜生、死んでからまで人口あましする」

て、こんどは踏んずけて来たど。その人の名前は九兵衛と名付つていたんだど。

油 取 り

むかし、稼ぎたくなくて、うまいもの食つて、ええ着物きて、唯ばり暮したい娘がいたつたど。こいつ、神さまさ^{おが}拌み申したど。

「神さま、どうか、唯暮される、うまいもの食つて、ええ衣裳着て、楽な暮しされるように」

て、神さまさ拌み申したど。そして願掛けしたところあ、ある日、御所車のよなな車ひつぱつて迎えに来らつたど。そして娘のどこさ、ひよこつとその車来て、

「お前か、唯いて、暮したいて神さまさ拌んだな」

「ぼだつし」

「ほんじゃ、この車さのれ」

て、連て行つて、その車さのせらつで行つたところあ、御殿のよななええどこさ連て行かつたて。毎日、うまいもの食せらつて、ええ着物きせらつて、唯ば

り置かつで、大きい屋敷。

「こっからこっちや行かんねぞ、そっちや行くなよ」

て、ついていられる。何日もぶらぶらて暮しているうちに、飽きて来たんだつて。そして飽きて行かんねと言わつたところさ行つて、だんだん、そおつと奥さ入つてみたら、向うの方で、何だか匂いが悪い、そいつさ、

「助けて呉ろ、助けて呉ろ」

という音あするし、何なもんだべなと、そつと開けてみたれば、大きいワタシ掛けて、人焼きしつたなだど。そつから、ダラダラ・ダラダラと油が流つて来んの、甕コ置いて、油とりだど。そうしてはあ、その娘が魂消て、来てはあ、神さまさ拝んだもんだから、神さまは、決して、「唯いて暮して行かれるようなことはない」ということを見せしめに、そこ見せんだべ。んだから、みんなそんなことは望まんないもんだ。

子育て幽霊

寺の門前先の飴屋に来て、六文（錢）持つて、

「あとこれきりだはあ」

て、飴買って涙こぼしたもんだから、不思議に思つて、その飴屋が追っかけて行つたど。それたれば、ずうつとお墓さ入つて行つて、そのお墓んどこさ行つたれば、すうつと見えなくなつた。

「はてなあ、奇態なごんだ」

て思つて、後つけて行つて、次の日、墓さ耳あてて、こうして聞くと、赤子の音が聞える。そして掘り返えしたんだど。そうして掘り返えしたらば、その飴なめらせて、赤子育でつだんだど。

んだから、大きい腹になつたときには、「子別れのお経」をあげつか、また月満ちた時ならば、決して産させねでは、やらんねもんだど。幽霊になつてからも、女は苦勞するから…。そしてその子どもを飴屋が連れて来て育てて呉つじやど。

馬 娘

南部の恐山行くと、子どもに会われると言わつて、行つたど。そうして、一人娘に死なつて、毎日泣いっただのさ、ある托鉢坊主に教えらつて行つたど。そうして行つたれば、

「決して、夜、夜中に、何日かいるじど、娘が来つから、言葉は掛けんなよ」
て言わつじやんだど。

そして夜中に、恐山のお堂さ行つたど。

その娘が死んだときの、棺さ入ったときの美しい衣裳で来たんだど。そうすつじど、まず、わらわらと、言葉かけんと言わつたの、耐えらんねくて、親たち両方から行つて、たぐつて、そうしたところが、その娘は、ガタガタ・ガタガタというけあ、身振いしつたけあ、馬になつただけど。

「おれは何にも、お前だに子どもになつて可愛いがらつて、育てらつて、おれは早く死んだ。おれはそっちの家に飼わつた馬だ。うんとこき使わつたあげく、乾

し殺さつた。このうらみを、なじよして払して呉^けつじやらええかしんなくて、死んでも思い晴れねから、お前だの子どもに生^{うま}つじやのだ。仇取つて呉れんなね、此処まで来た限りは、今度は、おれ、生命とつてやんなね」

て言わつて、和尚さまに御祈祷してもらつて、やつと馬の霊を静めてもらつて、歸つて来て、あきらめたど。

んだから、早く子どもが死ぬというのは、皆仇というもんだから、
「む・ご・さ・が・つ・た、いま一ぺん行き会いたかつたなんて思わないで、親に苦勞掛け
んのは、仇の子だから、あきらめなさい」
て、和尚さんに教えられてもどつて来たど。

かちかち山

むかしあつたけど。

かちかち山に狸が住んでいたんだって、そこさじさまが、焚きものとりに行つて、焚きものとする前に狸とったなだど。そして家さ持つて来て庭さ吊るしたんだど。そして、用足しに行つて来るうちに、

婆さまに、

「晚げ、狸汁すんなだから、んだから狸の足解いたりすんなよ」
て、じさま言つて行つたんだど。

そしたら、狸あ、じさま行つてから、

「ばんちや、ばんちや、ちいとゆるめて呉んねえか、足痛^いったいから、ちいとゆるめて呉んねえか」

「んだげんども、じつちやにゆるめんなて言わつじやもの」

「ええごで、ちいとばり」

「んだな」

て、ちいとゆるめて呉っじやど。

「いまちいと、こつちゆるめて呉んねえか」

「ほんじゃらば」

て、またゆるめて呉っじやど。そしてるうちに段々つん抜けてはあ、そして取ってしまったど。そして庭の隅^{すま}つこにあつた米搗き杵で、

「このばば、腐っさればば、ほに、叩き殺して呉んね、じじの仇に、仇討ちして呉れらんね」

て言うもんで、ばさまのどこ杵で搗いて殺してしまったど。そうすつど、狸あ婆さまを菰さくるんで、庭の隅^{すま}こさ押っつけではあ、こんど婆さまの衣裳きて、そして尻端しよって、手拭いなどかぶつてはあ、晩げの狸汁の仕度した婆さまの、牛蒡切りなどしつたの、一生懸命で俎板で牛蒡切りだど。そしてじさま来るまでには、煮て置かんね、一生懸命で、ばさまの真似して、鍋かけて待つてい

たど。

「ほげな、骨と皮ばりでどこも煮つどこない。尻のほったぶ（頬つぺた）でも煮て食せつか」

ほうして、ジョキジョキ切つて煮てはあ、菰さくるんで押つつけて…。
じさま帰つて来た。

「じつちや、まず早いがつたことなあ」

「ほだ、まず、用足しして来た」

「狸汁、^{こしや}拵つたぜはあ」

「ばつちや、一人で拵わつたのが、よく。荒びらんねがつたが」

「荒びらつじやげんども上手にして、まず、上がれまず、酒の一つも掛けて…」
そうしてこんど、お膳拵つて酒かけて、ばさま、

「まず一つ注ぐべ」

なて。じさま喜んでお膳さ向つて酒飲んだりして、狸汁だと思つて食つたれば、

「何だか油つ気のないのだな」

「んだか、んじゃ古い狸だからだべ」

「なんだって、しないことなあ、この肉。さっぱりうまくない」

そしたら、こんどきと思つてはあ、その婆さま尻尾出したど。

しないも道理

ばば 尻^けつつの

片びただ

そして尻、さか上りして逃げてしまったんだど。そうしつど、じさまごしやえではあ、狸汁だなてゝ。とんで行つて庭見たところが、菰の中き、ばばを丸裸にして血だらけになつて殺さつていたつけど。そうすつじど、じさまは泣いて泣いて、泣き明かして、毎日泣いっだど。

そしたば、そこさ鬼遊びに来たんだど。

「なえだ、じつちや、じつちや、なんで泣いって何しつた」

「狸にまず、ばば殺さつじやのよはあ、うーん・うんうん」

て泣いていんのよ。

「なじよに殺さつたのよ」

「これ、この通りだ」

「ほんじゃ、まず退治して呉れつから、狸退治に行つて呉る。んじゃ、南蛮味噌、南蛮ないか、南蛮味噌拵つて呉ろ。おれあ今日狸連^せて行んから、そして連せ来つから、その味噌だけ、まず拵つてで呉ろ」

そして、こんど、兎は狸んどこさ、

「狸、狸、あんまりお天気いいもの、山さ焚きもの取りさでも行つたらええんねが、かちかち山には、木あうんといっぱいあんぜ」

「んだな、兎ど…」

なて、まず二人で行つたど。そして枯木集めて一背負いずつ背負つて来た。そして狸あ前さ立つて、兎は火燵ち石で、カチカチ・カチカチつて。

「な・え・だ・ま・ず、カチカチ・カチカチつて」

「な・え・だ・い、ここあカチカチ山だもの、カチカチつて言うごで」

カチカチ・カチカチ。枯木だもの、そのうち火あついだ。

「なんだて熱いもんだな、何だべ、こりや」

「カチカチ山だから」

そのうち、背中さ背負ってだの、ボンボンて、

「ありや、カチカチ山で火あ燃えだんだごではあ」

なて、背中さ火つけたもんだから、火あボンボン燃えて、そして、

「切ない、切ない、痛い痛い、熱い熱い」

「ほんじゃらば」

わらわら解いて呉^けつから、なんて言ってるうち兎あ手間どっているうちに、背中焼けたんだど。

「ほんじゃ困ったごんだ。背中赤むけになった。薬つけて呉^けつから、歩^あえべまず、おれあええ薬持ったから、行ってみろまず、家さ」

そして、じさまに搾^せわせた味噌もって来て、

「うんとええ薬塗^ぬって呉^けれつからなあ」

て、そしてこんど、背中さべつとりと塗^ぬってくれて、赤むけの背中なもんだから、熱くて痛くてはあ、ピリピリ・ピリピリって…。

「痛い、痛い」

て泣いで、

「ほんじゃ困ったもんだな、この通り付けっど直るのだけんど、ほんじゃ何としたりええべ、その内に、あえつちや（あれに）行つてみんべ、背中洗いさ行んか」
「んだな、背中洗いさでも行かんね。ほんじゃ山の沼さ行くべ」

「ほんじゃ、おれと二人で行くべ」

そうして、こんど、狸を土舟さのせた。兎ばり木舟さのつて…。そしてだんだん行つて、ここで背中洗つてくれんの、と真中さ行つてから、

「土舟だから、じきにぼつこれる」

て、ジャクジャクと突つついて、そこさ沈めて、

「きさま、おれ、ばさまの仇討ちだからな。じさまに頼まつて来たんだから…」
て、どんどん突つついて、とうとう沼さ沈めて殺してしまったど。どーびんだどはあ。

鬼

婆（弥彦山の鬼婆）

山さ行つたらば、天女が下がつて来たつてよ。そいつ家さ連^せ来て、美しい着物脱がせて、自分の家の嫁にしたんだど。そして嫁にしておいて、子ども持ったりなんかえしてゐるうちに、だんだん年取つて、天女だったなて言つたのが、鬼婆みたいになつて、赤ン坊食^かねど生きていらんねぐなつたんだつて。

そして『おっかな橋』の下さ、針持つて来つたんだつて。そして赤ン坊おぶつて、女の人歩くと後から来て、赤ン坊の尻突^つつくもんだから、赤ン坊は泣くなだ。そうすつど、

「あねさん、あねさん、あんまりオボコ泣くでないか、ちいとまず降ろして乳でも飲ませてみたらなじよだ。降ろしてええがんべ」

なて、親切に降させて、そして乳飲むなんて、こがえ^えしてゐるうちに、さらつて行つて食^くい食^くいたんだど。そうしつど困つたと思つていたとき、

「そういう鬼婆が、おっかな橋さ巢喰つてでは困つたもんだ。ほんじゃ、おれ、

この鬼婆退治して呉んなね」

若い者が刀持って、そこに来て待つてだんだつてな。そしてあるとき、その、子ども取りしつたとき、若い者がいきなり手をぶつた切つてしまった。そして手をぶつた切つて取つたのを家さ来てしまつて置いたど。

それから、自分の家さ、元氣のええばさまが寝つだんだど。

「おれあ、こういう風に鬼婆退治して来たんだ」

「なじよな鬼婆だつたごどや」

「赤ン坊とつて食うというから、そこさ置かんねがら、おれは退治して来た」

「なじよな手なんだか、鬼婆の手見せねが」

て。

そしたら、「あまりええ」て、自分の母親なもんだから、見せたんだど。ひつくりかえし、ひつくりかえし見つだど。そしてはあ、婆さまが覚悟決めたんだか、片方の手あ出さないで、

「これあ、おれの腕だ」

て言うど、ふうつと空さ飛んでしまつたつてよ。

そして何処さ飛んで行つたかというど、それが越後の弥彦山さ飛んで行つたんだど。

弥彦神社さ祀らつていんのが、その鬼婆だど。

猿 蟹 合 戦

あるところに、猿と蟹がいでやつたど。猿と蟹は、よく山でなど遊んでたもんだごでな。この猿あ賢こくて、蟹が正直なもんだから、

「餅搗いで、食ねがあ」

て言わつて、餅搗いで、猿ばり力持ちだから臼でも杵でもするから、蟹は出・こばりしたど。糯米を出したり、何かを出したり。そして猿あ一生懸命搗いて、食うあええげんども、こんどは山から臼転がして餅食う競争だ。山から臼転がし

たら臼ぱり転がって行つてしまつて、餅ぱり残つて、猿あ臼さ喰つついて行つたもんだから、餅あ臼さあるもんだと思つて。臼は空からつこなもんで、こつちさ来て餅あもらわんなねくなつたど。そして、

「ほれ、ほれ」

て、熱いとこ千切つて、ほ・た・た・ぶ・さ・ぶ・つ・つ・け・ら・つ・た・の・で、猿のほ・た・た・ぶは赤くなつたど。

あるとき、蟹はオツカサにヤキメシ握つてもらつて行つたんだど。

またそこさ猿あ行つて、

「蟹どの、蟹どの、そのオニギリと、この柿の種子、取換えねが」

「そがな柿の種子と取換えだつて食かんねえも」

「食んねげんど、こいつ植えてなあ、水さえ掛けでつど、大きくなつど、柿実なんだ。そんどき食かれべ」

「そうか、おれ、腹くつちいから、呉れっから」

そしてはあ、蟹は土掘つて種子埋めて、毎日水掛けしつた。

ならざら 切んぞ

ならざら 切んぞ

そうすつど、柿は早くおがつてよはあ、ほんに何年も掛かんねど実^なんねえ木は、
ぐんぐん・ぐんぐんとおがつてしまつたんだつてはあ。蟹は毎日水呉れるもんだ
から…。

そしてはあ、柿もなるようになったんだつて。そして柿あなつて喜んでいると
こさ、猿あ、またキャツキャツキャツと山から降りて来たんだど。そして蟹あ見
つけて、

「こがえに柿あなつたんだぜ、んだげんど、おれあ登らんねもんだも、掬いで食
んねなよ、赤くなつたげんども」

「んだが、ほんじゃ、おれ掬いでくれんべ」

わらわら行つて掬いで呉つじや。そうしてうまいとこばり、赤いどこ掬いで食つ
た。

「ああ、うまいうまい」

て、食つて見せて、

「おれにも一つ振いで呉れんだ」

「んだか」

青いの一つばり、ばいっと振いで、

「渋くて食んね、赤いどこよ」

と言うど、タツペ（唾）引っかけて振いで呉つじや。意地のわるいことばりして、自分ばり食つてはあ、どんどん蟹泣かせてはあ、山さでつしり持^たつて、赤いのさはタツペ引っかけるやら、食^くつ欠^かくやら、意地のわるいことしたど。そうして痛くして蟹泣いっだんだど。そこさこんど蜂^{ばち}なんか柿の木どこさ来てで、見て、なぐさめで、

「わるい猿だ。まずこんじやらば、あの猿退治して呉^くんなね」

「生かしておかんねなあ」

「どうしたらええがんべ」

「蜂はまず出てきたって、あがな小^ちつちやこい身体^{なり}だべし、蟹なて言うたて、あ

がな小つちやこいなだべし、なじよしたらええがんべ」

そしたら栗も来て、

「みな小つちやこいものばりで分んね、ほんじゃ白いだ。白庭にいた。ほんじゃ白と相談すんべ」

「白あ屋根の上さあがって、栗あ火所ほどの中さ入って、蜂あ水甕みづがしの中さ隠つで、猿あ逃げて行くととき、ゴロゴロ転んで来て、ぶつつぶせ」

そういう相談が成り立った。そしてこんど蟹が呼ばりに、猿に行った。

「遊びに來い」

そして一生懸命で欺だまかして家さ寄せて、うまいもの食せるの、何だの彼だかんのつて、そしてうまいもの食せたの何だのといううち、栗は火所ほどの中さ埋いつだもんだから、バツと跳ねたもんだから、火あとんで、

「アチチチ…」

て、火傷やけどした。あっちこっち。

「ほんじゃらば、水でもつけろ」

て、蟹あ言うたもんだど。そうすつど水甕さ行つて、柄杓で掛けんべと思つたれば蜂あ来て刺したんだど。いやいや、こんどは居らんねはあ、どこさ行つたらええんだかはあて、蜂あブンブン来て刺すんだし、逃げたど。戸の口から逃げんべと思つたら、上から臼にどえんと落つて来らつて、捕らえらつて意地わるい猿あとうとう臼につぶさつたど。んだから意地のわるいことはさんねけど。どーびんと。

笠 地 蔵

貧乏して、食うにも食んねような貧乏なじじとばば、年取りの晩げ、
「この笠売つて、年取りしんべはなあ」

て、根性のええじじとばば、やつと細々と暮しつたな、町さ笠売りに行つたど。
その日あ一つも売んねがつたど。そしてずうつともどつて家さ来るどきに、お

寺の前通つたれば、六地藏立つてで、そいつさ笠もないで裸だから、雪あ降んな
気の毒だから、

「そんじや、この地藏さまさ、かぶせて行くべはあ、今夜、何もないったつてはあ、
地藏さまさ笠おさめて、雪除けにええでかなあ」

て、そうして眺めて、

「地藏さま、そうして年取れはあ、おらだも何もないけど、家さ行つて年取つこ
ではあ」

て、来た。そしたら、ばば、

「なじよだった。まず、いま来たどこだ。遅くなつたげんども、なんぼ笠売つど
思つても売んねがつたもんだから、さっぱり売んねもんだから、寺の門前の六地
蔵さまさ納めて、裸つむりだったから…」

「ええことして来たなあ、じんつあ、おらだも雑炊でもして年取んべちはなあ、
何ないどてええ」

なて、寝たんではあ。そうすつど、なんだつて外さ、ごやごや・ごやごやつ

て、騒にぎやかな音する。「ああ、ここだここだ、じさまの家ここだ」なていう音する。

「不思議な音する」

て思つて、奇態なことだ、こげな雪の降る晩、何来たことだべ。

「ここだ、ここだ、ここささえ置いて行くど、ええなだ」

何かドサドサつて音する。覗きもしないで家にいた。

「何だて、ここらにぎやかだぜ、何か物音したぜまず」

て、朝あさげ戸を開けてみた。そうしたらそこさ米俵六俵あつたど。地藏さまが置いて行つて呉くつじやつた。こいつで年取りしろて。んだから正直な者さあ、いつでも救われるもんだど。

団子どの

じっちゃとばっちゃ、団子^{こさ}拵^{こさ}って、団子、庭で臼で搗いで拵^{たが}って、持っているうちに、一つ落ちたんだど。そして団子、コロコロ・コロコロで行ってしまつて、穴ぼこさ入って、じさまその穴ぼこから入って行つたど。小^ちっちゃな穴こさ。

団子どの 団子どの

どこまでござる

御山^みの堂までござる

コロコロ

ずうつとコロコロ・コロコロって、じさまなど追かけて行かんね^こで、転んで行つてしまつて…。ひこつと出たところが、広い原の地藏さまの堂だつたど。そしてその団子、地藏さまの口さ、ぽんと入つたど。そしたら地藏さま、

「いやいや、今の団子^{うしろ}うまかつた。御馳走さま、ここにいろ、晚げ面白いことあつから、おれの後^{うしろ}さいろ、面白いことあつから…」

て教えたんだど。

あと、暗くなったら、鬼子どもらいっぱい来たんだど。袋かついで。お堂の前さ、ざあつと輪組んで、その銭出して博奕打ち始めたんだど。さいころ振って、コロコロ・ポーンと。そりゃこつち丁と出たの、こつち半と出たの、そつち勝つたの負けたの、勝つたの負けたので、ヤンヤンていたど。地藏さま、ちえつちえつと、じさまに合図したとき、ウチワでパタパタして、コケコーと言えと教えらつた

「コケコー」

「ありや一番鶏だ、いま少しだ。一生懸命で打てます」

ヤンヤンて、負けた勝った、負けた勝ったっているうちに、また、

「コケコー」

「こんど、二番鶏だ」

またしばらく経もよって、こんどは、

「コケコー」

「そりゃ、三番鶏だ。ほら夜明けっぞ、まず明日の晩げまで置けはあ、勝負は置けはあ、こんでは分んね」

て、ガラガラ行っちゃったど。

「こいつな、持って行け、こいつは団子の礼釈だ」

そうしてこんど、一つの袋さ皆積めて、やっと背負って、この穴から戻って来たど。そしてばんちやが心配して待っていたっけど。

「なんだ、まず、じじちや来ねがったもんだから、一晚げ来ねがったもんだから、心配して待ってただほでに、どこさ行ってござった、まず」

「こういんどこさ、団子さ追かけて行って、鬼子どもら、博奕打ち始めたもんだから、地蔵さまから鶏の真似しろと言わっで「コケコー」と言うたば、夜明けねうちに逃げて行つたのよはあ、そして地蔵さまに、そいつ持って行けと言わっで、そいつ持って来たのよ」

て、庭さ蓆敷いで、ざあっと開けたんだど。

「いや、こげな銭見たことないもんだから…」

じさまとばさま、魂消て、喜んであ、

「なじよしたらええがんべ、何買ったらええがんべ、こがな銭」

て眺めていたところが、隣のばさま、

「火呉くつでおくらえせ」

て、

「あららら、こっちの家で、こがえな銭どつから持ッて来たのや、どつから集めて来たのや」

て、

「はあ、金持ちだも、金持ちだ。こっちの家はとんな金持ちになつたもんだ。なじよなわけで、こがえな銭集めたもんだ」

そしたば、ばさま教えたど。

「おら家のじんちゃん、昨日、団子きんな拵こさつて団子転んだなよ、あの穴ぼこさ。そいつさ追かけて行つたのよ。そうして何処までも行つたらば、広い原さ行つて、地藏さまの口さ入つたのだど。そしたば、地藏さま、ここさ、晚げ面白いことあつ

から泊つてろ、そうしておれに教えらった時、鶏の真似しろって言わっで、鶏の真似したら、鬼共らこんど夜明けたはあて、みな錢置いて行つたはあ、その錢、地蔵さまからもらつて来たんだど」

「はあ、ええ、こんだごでなあ、こつちの家ばり。ほんじやらば、おれもじさまさ団子拵えてあずけてやらんなね、こがえしていらんねまず、家さ帰つて、団子拵え始めた。そして、

「おら家に穴あんべか」

て、鼠の穴さ、ろくなこと転ばねの入^えつでやつたど。そして「追っかけろ」で、追けらしてやつたんだど。そうすつど、じさま、行かね団子、押つけ押つけ、「団子どの、団子どの」で行つたど。そうすつど、やっぱり広い原の地蔵さまどこさ行つたど。そして地蔵さまのどこさ行つて隠つて見つたど。そうして地蔵さまが「此処にいろ」とも何も言わねんだげんども、聞いて行つた通りに隠つていたど。こんど時刻になつたれば、鬼共ら集まつて来て、

「ゆんべな置いて行つた錢、どこさ行つたべ、さっぱりなくなつた。誰持つて行つ

たべ」

ヤンヤンとなったど。

「ほんじゃ、仕方ないから持って来らんねべ」

て、鬼共ら銭取りに行つて持つて来たど。そして、こんど始まつた。うれしくて陰でいたじさま、何言うたつて耐えてらんねくて、地蔵さま合図しねもんだから、自分でいいくらい加減にコケコーて言うて、

「なんだまず、鶏みたいだげんど、今夜の鶏はおかしげな鳥だな。昨夜も鶏でなかつたがもしんねえぞ。見ろまず、こころ」

て言うたば、

「地蔵さまのかげに、じさまいだどら」

そうしたところあ、鬼共らに引ずり出さつたど。じさま。

「このじじだ・ごん・じゃ、昨夜の銭持つて行つたのも、このじじだな。このじじだば、くたばるほど引っぱだきつけてやれ」

て、こんどは片輪になるほど、せめらつて、そしてはあ、じじ銭浚うどころか、

したたか叩がっで、かつちやばがったりして（引つかかれたりして）、血だらけになつて生命からがら逃げて、泣き泣き来た。ばさま待つていたど。

「なんだ、じじい」

て、泣き泣き来たもんだから、血だら真赤になつて、「何して来た」と言うたら、

「錢浚うどころか、とんだ目に会つた。昨夜な、おれでない、おれでない、おれなの持つて行つたんでない、隣のじさまだ、隣のじさまだなて言つたつて分んねえがつた」

「馬鹿じじいだからよ、隣のじじの番前までせめらつて来るじじい、あるもんでない」

うんとせめらつたど。

手まり唄

なんのし　なのは

あおのかす漬け　皿さ盛って

お前あがれ

わたし食べぬ

われと思わねで

九つ小松で　十から一丁一丁

不　動　洩

松川の不動洩に不動院という寺がある。

馬の洗い場さ、馬、ずうつと川さ入つてやって、馬上げて来^くつと思つたれば、馬の尻尾さ河童がぶら下つてきたど。そんとき、殺さねで助けてもらった証文を

書いたの、不動院に残っている。

決して子どもらは川で災難に会って、水で死んだなんていうことないようにするから、許して呉^けろという「詫証文」だど。

山崎の棘拔きの家伝薬

蛇が鶏の卵盗むので、卵さ針さしつたのを、蛇が知らずに呑んだから、死ぬかと思っていたら、蛇がずうつと行って、薬草のそこさ行って、パクパク・パクパクと薬草を食ったら、すんと針が抜けてしまった。そこで蛇から教えらっじや、棘拔きの薬だど。

五輪窪の送り狼

むかし、狐だ狼だといたとき、狼が歯さ棘さして、ヨダレたらして泣くように街道傍にいたとき、婆さまが通り掛つて、ギィツと腰巻きの端で押さえて、棘抜いて呉^くつじやど。

そいつ、その婆さまば送り迎えすかつたんだって。狼が…。

雷　　さ　　ま（福島）

そのオツカサが、年寄りをうんと虐待するオツカサだったそうだ。そいつが、その家の前さ、お雷さまが落ちなさった。そうして、お雷さまがおなりなつたもんだから、そのオツカサが、お雷さまおつかないもんだから、蔵さ逃げだんだど。ガラガラ逃げて蔵の中さ入ったれば、その火の玉が蔵さ登ったって。

そのオツカサ助かったげんども、蔵さ爪の跡残ったんだって。
あんまり年寄りいびつたので、罰当たったんだべ。

お 杉

稲子さ、稲子山越えて、和田から行くとき、その通り筋にすばらしい太い杉の木あったんだ。その杉の木が「お杉」となって、お伊勢さまにお詣りに行ったって。そして天井さ、お札、ちゃんと上がっていつかった。

そいつ、ホラになったもんだから、下さ蛇巢食って、そこ人歩くと吞まっただもんだから、天火（雷）で焼がっでしまった。

× ×

夫婦松だの相生松だのは、切つどきは片一方でなく、二本一緒に切らんなねもんだ。

一 足 片 片

かたかた

ここ（糠野目）のお山王さまに、一足片々という人が、門前先にいだったど。わらじ売りしたんだど。一足片々とは一足買った人さ半分まけるんだど。そのため「一足片々」と名付けらっじやんだ。

あるとき、上杉さまが危篤になって、よつぼどの間になって夢見たど。自分が一番高い立派な壇さ、自分が殿様だから、上られるのが常だから、とととと行ったらば、赤鬼青鬼に追わったど。

「なんだ、貴様の来つどこでない」

「おれは米沢の藩主だ。ここに上るのは何が不思議だ」

「お前のような者は、ここさ上る資格はない。ここに上るのは、一足片々て、この住人で、神様同様の人だから、これはここに上げるのを待っていのだから、誰も上げらんね」

そうすつど、殿様が目覺まして、家来をよこしたど。そうすつどほいと乞食みたいな

恰好して、わらじを一足買った人さ片一方、二足買った人さ一足まける。なしてまけると言う、わらじが必ず片一方から切れるもんだ。そんとき役立たなくなるから、片一方履くと、またしばらく間に合う。そういうわけだ。そういう奇特な人、ここに上げんのだから、お前のような者は上がる資格はない。ただ人使つて…。

そいつあくやしくて、くやしくて、取換えっこしろて言うた。

「取換えっこなど、ええどこでない、殿様のええようにしてくろ」
て言うたど。

そういう人がここに居てやったんだど。

佐兵ばなしのことなど ― あとがきに代えて ―

安部名平次編『佐兵物語』によれば、佐兵というのは、享和三年（一八〇三）に高畠町露藤に生れた高橋佐兵次という人物であったという。その人の逸話という形で語り継がれている「佐兵ばなし」は、多くの類話を持っていて、南陽市上野の「稲場の平次」などもその一つであり、大きい目で見れば安土桃山時代から江戸時代にかけて生み出された伽衆による「語り」につながり、類話が類話を呼んだものと思われる。封建時代が崩れかけて来つつあった江戸末期。しかも高畠という場所が、幕府領と上杉私領との間に三度もゆれ動いて、所領がはつきりしなかったということなどが、このような佐兵を生み出す一つの理由でなかったかと推測される。その間の高畠領の動きを見ると次のようである。

- ・慶長より寛文四年まで上杉領
- ・寛文四年中、一時天領となる
- ・元禄二年、天領となる

・寛保二年、上杉領となる

・明和二年、ふたたび天領となる

・寛政三年、上杉預ヶ地となる

（この間、寛文六年に高梨利右エ門の一揆と文久三年に屋代郷騒動おこる）

上杉藩の儉約令は特に有名で、高畠領が幕府直支配の時代と上杉領時代の政策に大きい矛盾を感じたのは当然であろうし、それが幕末に近づくにつれて、武家支配そのものの矛盾を、人々はそれぞれに生活の中で感じて来たものであろうことは想像にかたくない。このような中に「佐兵ばなし」を置いてみると、それは十分な存在意味を持つているといつてよい。従って「佐兵ばなし」の佐兵が実在の人物であつたという考証もさることながら、それ以上に「佐兵ばなし」の持つ「はなし」としての特異性に注意したいと思う。

米沢の長手に「怪盗伊佐」の昔話がある。次の九話である。

- ①六尺の桶 ②名主どんの香炉 ③偉駄天 ④水遁の術 ⑤吉兵衛さんと伊佐
- ⑥伊佐の最後 ⑦三反歩の田圃を盗むこと ⑧和田の女主人にカブトをぬいだ

話 ⑨ネズミに化けて生糸を盗んだ話

この昔話の特色は大泥棒が、旦那衆や役人の目をかすめて活躍をするところにあるといえる。言ってみれば義快盗とでもいえるもので、貧しい人にほどこすということにでもなれば、当時の人々に歓迎されたであろう。このような快盗の話は、当時の人々の藩政に対する不満の表出といえるだろうが、「長手の伊佐」の場合には、まだ人々と伊佐の間には相当の距離があったのではないかと考えられる。伊佐は人々の願いを込めた偶像に他ならないし、人々の手の届かない空想の所産でもあった。

「伊佐」に比して、「佐兵ばなし」の佐兵は次の点で注目してよいものである。
(1) 木小屋の若衆と共に生活していること

木小屋は当時の若衆の仕事小屋であった。置賜における若衆宿の一つでもあったと考えられるが、その点は別にしても、若衆と雑談をかわす佐兵の大衆性がそこに見られる。「死んだ馬が草食う」「彪の皮の屋根」がそうである。

(2) 旦那衆に対する返報がえしはユーモアと同時に世相に対する批評でもある。

旦那衆に対する批評は「しらみ五升を質入れのこと」などに痛烈である。佐兵がもらった新しい綿入れを質屋にもって行くと、質屋の番頭がからかって佐兵のきたない着物のしらみをも質帳に五升とつけたので、それをも受け出すといつて、旦那を困らせた話である。しかしここではむしろユーモアが表面に出ていて面白いが、残酷さも加わって来るところが注目されよう。

(3) 役人に対する残酷物語がいくつかある。役人に対してはユーモアが消えてしまふ。

藩制の末端であつた役人をうまくだました話はいくつかあるが、「十手風を吹かせた役人をこらしめること」という話では、濁酒造りをしている所に案内するといつて、佐兵が役人をあちこち引っぱり廻した話である。この話はユーモアはなくなつてしまつてあるのは役人に対する怒りである。

しかし人々の記憶に残るのは、むしろ「酒の籠抜け」のようなユーモアのある話であつたと思われる。それは同時に庶民の生活の中で蓄えられたエネルギーというものの一つの形態でもあらう。役人といえども人間であるといった気持ち

一方にあり、他方には、封建社会の矛盾の形としての役人というものがあつたのであろう。その両面性こそ庶民の心の中の矛盾を示しているものに相違ない。

この「佐兵ばなし」にしても「長手の伊佐」にしても、むしろ私の関心は、このような昔話の継承の姿なのであるが、このことについては「木小屋話について」（米沢東高『研究紀要』五号）「木小屋話再考」（『置賜の民俗』三号）を参照いただきたい。なお今まで集めた「佐兵ばなし」は次の三十話で、「魚屋が抜かった話」「エジコ作り」の二話は、この集で初出である。

- ①豆腐のすだれ ②死んだ馬が草食う ③ねずみとり ④田植の名手 ⑤苗の逆さ植え ⑥酒の只飲み ⑦彪の皮の屋根 ⑧琵琶頸の俗地名と十三・七つ ⑨十一毛の猫を見ること ⑩屋根葺と知恵くらべのこと ⑪自分が食うに足りない ⑫煮たった湯を吞む ⑬旦那に行きたくない金 ⑭煙草の虫とり ⑮佐兵さん ⑯嶋蔵さんとの謎問答 ⑰しらみ五升を質入れのこと ⑱三味線を引きずること ⑲一樽の砂糖を皆食う ⑳植木売り ㉑桑こき ㉒酒の籠抜け ㉓ローソクを持ち出した話 ㉔浪人と佐兵のこと ㉕番所の役人と問答のこと

- ②⑥ 十手風を吹かせた役人をこらしめること ②⑦ 御法度の糯米を持ち込むこと
②⑧ 佐兵次口説節 ②⑨ 魚屋が抜かった話 ③⑩ エジコ作り
なおその中で①①・②①・②②は「稲場の平次」という話として語られたものであり、
②③は「佐兵ばなし」「稲場の平次」の双方にある話である。

この集を編むに当り、近きよさん（高畠町糠野目・明治三十一年生れ）と家族の方々の多大の御援助があったことを記し感謝申し上げるとともに、二集・三集が継続して編まれるよう御協力をお願いする次第である。

田の中の田三郎

近きよ嬸昔話

昭和44年8月29日

編者 武田 正

（南陽市三間通232の3）

山形短期大学民話研究センター資料叢書

田の中の田三郎

近きよ嫗昔話

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年十二月二十四日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）

- 『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』（一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』（一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続々 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』（一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『牛方と山姥（四） 海老名ちやう昔話 第四集』（一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『飯豊町昔話集 ― 大平・新沼・高畑 ―』（一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』（一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『お杉お玉 小国町昔話集（一）』（一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『さとりのお化け 小国町昔話集（二）』（一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集（三）』（一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』（一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊）
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』

（一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊）

- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』（一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊）
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』（一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊）
- 『ちようじやのむこ』（一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊）